

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷(十二第)

行發日一月一年四和昭

新年特別號

營利の事業に屬せざる一時の所得 . . . 法學博士 神戸 正雄

包括社會學概念批判 . . . 文學博士 米田庄太郎

明治初年の大阪の新工業 . . . 經濟學士 黒正 巖

リカアドウの恐慌論 . . . 經濟學士 谷口 吉彦

豫算に依る企業の統制 . . . 經濟學士 大塚 一朗

交通事業の經營主體 . . . 經濟學博士 小島昌太郎

明治初年大阪の御用金 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

(禁轉載)

明治初年の大阪の新工業

黒正巖

一 緒 言

明治維新以前に於ては各藩が恰も一獨立國の如き觀を呈し、藩内に於ては成るべく自給自足の經濟を行ふ事に力めた結果、工業の發達は著しく阻害せられ所謂顧客生産の域に停滯し、商品生産は殆ど行はれなかつたのである。従て之を生産技術の方面より見れば手工業又は家内工業であつて、大量需要を有する貨物は問屋の手によつて配給せられた。各藩はその藩内の特産物にして日本全體に需要を見出しうる貨物は多く之を藩の專賣とし、又は一定の商人に專賣權を與へてその配給を司らしめ、その藩内の需要を充たして尙ほ剩れるものは大阪に搬出し、その代償として貨幣を藩内に移入し、又は債務の辨済に充當した。かくの如くして各藩は大阪に於ける藏屋敷を通過してその特産物を大阪の商人に賣却し、大阪の商人は更に之を各地に送り出した。即ち當時の大阪は日本各地の産物の配給の中心點であつて、大阪が天下の臺所であつたといはれるのは全く

この意味である。明治維新以後、藏屋敷の制度が崩壊して大阪に於ける貨物集散の形態は變化したけれども、大阪は依然として貨物配給の一大中心をなしてゐる。併し乍ら今日では昔日と異り、單に他地方のものを一旦集めて更に之を移出するといふが如き配給の中心地としてではなく、その國民經濟上重要な意義を有する所以は、大阪自らが貨物の生産地であるといふ點に外ならぬ。繊維工業は固より機械工業化學工業以下殆ど凡べての工業が大阪市の内外に密集し、日本の國民經濟は大阪市の工業を除いては全くその本質を理解する事は出来ない有様である。従て大阪が工業都市として重要な地位を占むるに至つた過程は即ち又日本の工業的發展を示すものといふ事が出来る。余は本稿に於て明治初年特に維新以後二十年頃迄に存在し、又は成立した工業の特質を概観し、當時日本各地に起つた新工業と如何なる差異を有するかを覗ひ、以て大阪に於ける近代工業の先驅并にその發達の道程を考へようと思ふ。

二 明治初年に於ける新立工業の特徴

明治維新以前に於ても衣服類又は陶器類の如きものは貴賤上下等しく消費する所にして相當に大量需要があり、その生産組織も稍々進歩してはゐたけれども、之とても問屋工業以上に出でず、多くは手工業にすぎなかつた。衣服類特に木綿物は地方に於て婦人の手仕事として行はれ、

只大都會の附近に於て家内工業的に生産せられたのみである。而して明治維新以後に於ても一般の民衆の生活様式はさ迄急速の變化を來さなかつたから、一般民衆の需要を充たす爲めの工業并に舊來よりの消費需要に應ずる爲めの工業につきては新しき技術又は生産組織は殆ど採用せられなかつた。所謂新式の工業は新政府の確立并に歐化思想に基いて需要を生じたる外國品を生産するものに限られた。この全く新なる需要品の生産は舊來から存在した工業者の轉業によつて模造せられたけれども、併し到底充分にその需要に應ずる事は出來ず、従て何れも外國より輸入せざるを得なかつた。而してその輸入額は頗る莫大の額に上りたるのみならず、當時舊藩時代以來濫發せられたる紙幣は未だ整理せられずして財界を甚しく壓迫し、對外爲替が頗る不利の状態にありしを以て、輸入超過は當時の人々の最も恐れた所であつた。故に日本國內に於て外國品に代るものを生産するの工業を成立せしめ同時に又輸出品工業の發達を計つて輸入超過を減少せしむべしとの考へは當然に起つて來たのである。

併し乍ら維新直後に於ては尙ほ社會は不安動搖の状態にあつて、政治上に於ても諸家の政見が屢々相扞格し、又幣制の紊亂は庶民の生活を脅威したるが故に、政界の安定、貨幣制度の確立が最も重要なものと考へられ、他を深く顧慮するの暇がなかつた。それは公議所日誌等に見ゆる公議人分課等に工業に關する部門の全くなかつた事に徴して推察出來る。明治五六年の頃には社會

も稍々安定の状態となつたが、同時に輸入が増加して來たので、政府も漸く積極的に産業の保護獎勵をなすに至つた。併し直接に民間の工業を保護獎勵する爲めには多額の經費を必要とするが、然かもその財源がなかつたから、西南戦争以前に於ては主として政府自らの需要を充たす爲めに特殊工業の官營を行つたにすぎぬ。政府が眞に民間の工業を保護獎勵するに至つたのは明治十一年以後の事であつて、一方に於て官營又は半官半民の模範工場を設置し、或は授産所、舎蜜局を設けて新式工業の知識の普及技術の訓練を行ひ、他方に於ては民間に資金の融通、機械器具の拂下、技師の派遣等を行つてその發達助成に力めたのである。その主たる財源は起業公債である。起業公債は千二百五十萬圓にして時の大藏卿大隈重信は書を上つて起業公債の發行を主張した。併し起業公債の費途は國內運輸の便を開發し、原始産業を振興し、又士族授産の目的を以てする開墾等を主とし、直接に工業を興す爲めに費された所は比較的に少かつたようである。

かくの如く政府は自ら官營模範工場を作り又は政府の需要品製造工場を作つたが、それは從來より存在せし需要の爲めではなく、全く新しく起つた需要に應ずるもの、又は外國輸出向の貨物の製造に關するものが大多數を占めて居る。例へば造幣局、富岡製絲所、堺製糸場、新町屑糸紡績所、綿糸紡績所、羅紗織場、築地製茶場、横須賀小野濱兵庫長崎鹿兒島等の造船所、深川セメント製造所、赤羽工作所、品川硝子製造所、千住製絨所の如く官設の新式工場は即ち之れであ

る。又民間工業にして政府の保護獎勵をうけたものも亦概ねこの種に屬する。而して之等官設并に多くの保護を受けたる民間工業は、特殊の地理的狀態を必要とするものは別として、多くは東京の附近に限られて居る。之等の官設工業はその成立の目的と機能とを果し、民間工業の發達を促したる爲めも早この種の工場の必要が減じ、その大半は民間に拂下げられ、直接國家の需要品を生産するものゝみが今日迄官營工業として存続して居るにすぎぬ。又民間の新工業も政府の保護なくとも充分に存立しうるに至り、全く自由獨立の工業が行はるゝに至つた。而して先づ最初に模範工場制度が起つたのは當時の人々が新式の生産技術に通曉せず、之が缺を補ふの必要があつたからである。次で保護制度に推移したるは當時財界不安にして起業資金に乏しかりしが故に、折角相當の生産技術を修得するも工業を起す事が出来なかつたからである。故に起業公債發行以後に於ては勿論その以前に於ても、工業を保護獎勵する場合には、單に僅少なる補助金を下附するが如きものではなく、多くは起業の資金を貸與又は下附し或は工場全體を無償にて拂下げたものもあつて頗る多額に上つて居る。以上は明治初年に於ける日本の新式工業の一般的特徴であるが、然らば當時の大阪の工業は如何であつたか、以下少しく詳述するであらう。

三 明治初年に起れる大阪の新工業

已に述べたるが如く、大阪は徳川時代を通じて貨物配給の最大中心地であつたが、大阪固有の工業としては少く、従て大阪は工業都市ではなく問屋都市にすぎなかつたのである。固より遠隔地より移入する事の出来ない貨物につきましては、當時已に大阪は大なる人口を有したる關係上、相當に盛んであつたことを想像する事が出来るけれども、稍々多數の職人を雇傭して所謂マヌファクツールの形態に於て工業を經營して居たものは極めて少く、殊にそれが明治時代に迄存続したものは頗る稀れである。商業資料には維新前より存在する工場として大阪府下を通じて十三ヶ所を示して居るが、その中現在の大阪市に屬するものとしては、東成郡東平野町膠製造所(享保三年九月)、南區御藏跡町赤松陶器製造所(寛政二年正月)、西成郡川崎村渡邊硝子製造所(文政二年五月)、西區長堀橋三丁目若竹團扇製造所(寛政元年五月)の四つを擧げて居るにすぎぬ。³⁾勿論尙ほよく調査すれば他にも維新以前からのものもあると思ふが、併し相當に規模の大なる工業が少かつたことは明かであらう。更に明治初年に於ても工業は尙ほ大阪の重要産業ではなく、従て大阪の振興策として第一に考へられた事は商業取引の改善であつたことはいふ迄もない。試みに大阪市工場一覽を見るに、明治の初年に成立した工業にして今日迄存続して居るものは極めて少い。中には所有者が替り又は經營組織が變つた、めに、成立年次が變更されて居るものもあるが、何れにしても大阪の工業は明治初年には頗る幼稚なものであつて、工業は大阪にとつて重要な地位

を占めなかつた。而して造幣局を除いては大阪には官營工場とはなく、又政府の直接保護を受けたものも、東京に比して著しく少いことは注意に値ひする。今大阪市内及びその附近に於て明治の初年に成立した新式工業の主なるものを示せば次の如くである。

(1) 造幣局 大阪に造幣局の設置せられた事が大阪の今日の經濟的發展をなすに與つて方ありしは言ふ迄もないが、同時に造幣局が江戸に設けられずして大阪の地にトせられた事は聽て又當時の大阪が經濟的にも政治的にも江戸より遙かに重要な地位を占めて居たからではあるまいか。それはごも角として、明治四年に開業して以來、専ら貨幣の鑄造に従事したが、精鍊鑄造共に舊來の技術と異り又材料も違つたので、貨幣鑄造の補助工業をも自ら經營せざるを得なかつた。明治政府が確立され經濟界が安定してから、大阪の經濟的發展、否日本の經濟的發展に重要な意義を有する點は、貨幣を鑄造するといふ事よりも寧ろその補助工業にあつた。例へば硫酸製造所、曹達製造所、瓦斯製造所、骸炭製造所、反射爐鑄鐵所の如きは之れであつて、この方面の技術が茲から傳習せられたるは勿論、そのまゝ民間に拂下げられて夫々大なる發達を遂げたのである。即ち今日の造幣局は單に國家の需要を充足する爲めの技術工場にすぎないけれども、明治初年の創立當時に於ては新文化の源泉なりしと共に、又官設模範工場であり又國家自給の機關であつて、今日とは種々の意味に於て異つて居た。尙はこの事につきては本庄博士が、明治大正大

阪市史紀要第一號に於て詳述して居られるから、茲には省略する。

(2) 織維工業 大阪の織維工業として今日最も重要なものは木綿紡織工業である事は改めていふ迄もないが、それが大工業となつて現はれたのは明治二十年以後に屬する。新式の紡績工場は文久三年に薩摩の島津侯が初めてその領内に英國より機械を購入して經營したるものを以て嚆矢とし、明治三年に大阪府下堺に設立せられたる堺紡績所は初めその分工場であつたらしい。之は後に政府の模範工場とせられ、政府が買上げ、更に再び民間に拂下げられたものである。大阪市内に於ける最初の紡績所は明治十二年に創立したる澁谷紡績所である。之は政府の補助を受けて居たが、後に堂島紡績として全く民營のものになつた。その後桑原紡績所も政府の保護の下に創設せられた。更に明治十六年には大阪紡績會社が三軒家に創立せられた。之は元と澁澤榮一氏等の有力者が將來紡績業の有望なるを見て會社設立の計畫を立て、山邊丈夫氏を外國に派遣して調査せしめ、その歸朝後設立に力め遂に十六年に至つて完成したものである。之は二十五萬圓の株式會社であつて、恐らく我國に於ける株式組織の紡績業の先驅であり、同時に株式工業の濫觴であらう。併し乍らその經營は必しも有利ならず、種々の困難に遭遇したるも、遂に海外輸出の計畫が成功し、茲に同所の基礎が確立せられ、之に次いで二十年以後多くの紡績業が起り、我國最大の工業になつたのである。

5) 大阪府誌二編五一七頁

6) 同上

7) 大阪府誌二ノ五三〇頁以下 大阪紡績沿革調査文書

次に全く新に起つた纖維工業の一部門としてメリヤス工業を一瞥しなければならぬ。メリヤスは已に維新前に外國より輸入せられて居たがその製法は未だ傳はらなかつた。然るに維新後西洋式の兵制を採用するに至つて西洋靴を用ふる事となり、從て又靴下を必要としたが、當時の靴下は手編のもので高價にすぎ、又全部布製のもは伸縮不自由にて使用不便なる爲め、メリヤス製のものが必要するに至つた事が、メリヤス業を興隆せしむるの動因であつた。而して之は遂に大阪の大工業となり、今や大阪はメリヤスの生産に於て日本第一位を占め、その生産額も全國の四割六分を占むる有様である。我國最初のメリヤス工場は、明治三年伊勢勝なるものが東京築地入舟町に於て開いた工場である。大阪に於けるメリヤス工業の始祖は上田長次郎であるが、之も矢張り伊勢勝の系統を引いてゐる。即ち上田は伊勢勝の友人が伊勢勝より譲受けたるメリヤス機の内一臺を乞ひ、之を以て大阪に來り、明治五年十一月(大阪編年史には明治三年とある)に大阪中之島一丁目(今の中之島公園の所在地)にて開業した。時の兵庫縣權知事が之を後援し、製造技術の如きも全く秘密にして居たといふ事である。⁸⁾上田は殆ど獨占的にメリヤスの製造販賣を行ひ大なる利益を擧げたるを以て、翌六年には大築治助は南本町にて、井上伊八は中之島三丁目にて各自メリヤスの製造に従事し、中島定治郎は小西善兵衛と共に開業した。かくの如くメリヤス工業は急速に發達し然かも一般の需要も増加するの傾向あるを以て、時の大阪府尹渡邊昇はメリヤ

8) 三宅禿堂日本メリヤス全書四、五頁 藤本昌藏日本メリヤス史五四頁

ス工業が將來大阪の重要産業となるべきを想ひ、平野町四丁目に官設模範工場を設置するに至つたが、間もなく失敗に了つた。明治七年の頃には營業者が著しく増加したので、競争が激甚になり利益も減少するの傾向であつた。模範工場の失敗の原因も之に存するものと思はれる。殊に當時メリヤスの需要は一般の小賣市場を相手にするものであつて、各營業者の生産額も少く、製造規模も小さく、全く個人企業であつた。軍隊の大量需要を自ゐてに營業し初めたのは杉谷源七にして、明治七年の事である。爾來年々メリヤス工業は盛大に赴き、生産技術も進歩し、靴下以外の種々のものをも生産しうるに至つた。殊に西南戦争による軍隊需要の増加は著しく斯業の發展を促し、清國への輸出をも行ふといふ有様であつた。かくしてメリヤス工業は一進一退しつゝ大阪の大工業の一つとなり、初め國內需要に應ずる爲めに起りしに拘らず、今日にては主として外國市場を目標として經營せらるゝに至つた。この發展の道行については最近京大經濟學部學生福島七太郎氏が詳密なる研究をせられた、近く何等かの形に於て發表せられるであらうから、茲には之れ以上論及しない。尙ほ大阪にメリヤス工業が起つて以來、明治二十年頃迄に創立せられたメリヤス工場は相當の數に上るが故に之を一々列擧する事は他の機會に之を譲る。

この外纖維工業に屬するものにして新式工業は少く、毛織物の如きも多く輸入せられ、明治九年に伊藤九兵衛氏が毛布製造を初めたのが最も古いものであつて、一般の毛織が大阪に於て生産

せられるに至つたのは明治の末期の事である。尙ほ岡島千代造氏は明治十年の頃よりモスリン友禪工場を瓦屋町に起し、爾來苦心研究の結果之が製造に成功し、¹⁰⁾今やモスリン工業は大阪に於て相當重要な地歩を占むるに至つた。

(3) 化學工業 新工業として明治の初年に發達したものの内、化學工業は最も注目すべきものである。固より我國は獨乙の如く化學工業の發達すべき條件を欠ぐと雖も、尙ほ之を保護獎勵すれば相當に發達すべき見込の存するものも少くはない。殊に明治初年に外國より種々の染料が輸入せられた爲め、在來の染料の生産は甚しく打撃を受け、就中阿波の天然藍を殆ど一手に配給したる大阪染料商并にその生産者たる阿波の農民にとりては死活の問題であつた。この外洋式建築の流行と共に窯業、硝子製造業、マッチ製造業、肥料製造業、洋紙製造業、製革業、シャボン製造業の如き新工業が續々と創設せられ、又造幣局内にも種々の化學工場が出来た。今その主なるもの、成立事情を概説するであらう。

化學工業中最も異彩を放つてゐるものは五代友厚の經營になる製藍工業である。彼がこの事業を思ひ立つた動機は前にも一言した通り、舊來最も多くの需要のあつた天然藍が外國のインディゴに壓倒せられ、その輸入額が多額に上つたので、この輸入を防遏し同時に國産の獎勵をなさんとするにあつた。而して彼は同郷人にして當時執政の大任にありし大久保利通の保護を受け六

10) 沿革調査文書 大阪府誌二ノ四八六頁

十萬圓の巨額を補助せしめて明治九年大阪市堂島(舊市役所及商業會議所跡)に工場を設けた。五代氏の傳記に記す所によれば、大なる煙突を立てその使用する職工も千を數ふる程の大規模の工場であつたといふ。¹¹⁾併しその内容につきては之を詳にする事が出來ず、五代氏の傳記は稍誇張の嫌なきやと思はれる。大阪編年史にも、「九年五月、始めて製藍業を起す」と記されてあるのみである。五代氏は留學生を外國に派遣して製藍技術を研究せしめ、又外國人技師を招聘して經營大に力めたけれども、遂に外國品に競争する事能はずして間もなく廢止された。

硝子類の製造は、已に明治以前より大阪に於て多少行はれてゐたが、一般の需要が少かつたので、大なる發達を遂げなかつた。然るにラムプが次第に使用せられ、又その他の硝子器が多く需要せらるゝに至りたるも、劣悪なるものが可なり多く製造せられたゝめ、日本製硝子の眞價を失ひ販路杜絶の有様になつた。茲に於て伊藤契信なるもの會て造幣局用硫酸瓶の製造を依頼せられその製造に従事したるの故を以て、之が研究をかねて東京品川硝子製造所に職工を入所せしめて製造法を研究せしめ、その業了るに及んで明治十五年之等の職工を以て府下西成郡川崎村に日本硝子製造會社を起し、更に翌年島田孫市を聘し技術の改良を計つた。島田は十一年以來品川硝子工場に勤務して斯道の經驗を有したるも市場關係はこの工場の經營を困難ならしめ、遂に二十年に至つて解散したので、島田は個人にて之を讓受け獨力にて研究を續け今日に至つたのである。

製造戸數は十二年には六戸、労働者數も僅か百三十一人であつたが、逐年増加の傾向を示し二十年には三十二戸、労働者四百人を超ゆるに至つた。併し何れも小規模の個人經營にして全く手工業的のものにすぎなかつた。¹²⁾

西洋紙の製造は最初百武安兵衛によつて計畫せられた。彼は洋行中蘇國エデンバラにて製紙機械を注文しておき、歸朝後大阪に於て政府の許可を得て會社を創立せんと欲し、明治四年四月爲替會社及び開商社に出資を求めたるもその交渉のまどまらざる間に機械が到着したのでその代價を支拂ふ事が出來ず、爲めに大阪府廳が一時之を引き受け北大組第十八區玉江町に於て工場を設立したが、明治五年四月に至りて後藤象次郎等の結社たる蓬萊社がその拂ひ下を受け、更に眞島氏の手に移り、轉々して十七年には下郷氏の經營の下に大阪製紙會社と改稱せられた。¹³⁾後に中之島製紙會社となつたのは之れである。最初東京に起りたる洋紙製造は、紙幣、地券その他主として官府の需要に應ずる爲めであつたが、大阪の製紙工業はこの點に於て不利であつた事が、その經營困難の一因であつたと思はれる。明治十九年下郷氏の個人工場となつてからは主としてマツチ用紙及び包装用紙を抄造したといふ。

この外新式の化學工業としては、大阪アルカリ製造會社(明治十二年)、大阪セメント會社(明治十八年)、硫酸製造會社(明治十三年)、春元石鹼工場(明治十二年)、眞島製糖場(明治九年)、

12) 大阪府誌二ノ三九頁以下

13) 眞島襄一郎舊記(日本工業史、化學工業編二一六、二二一頁)

大阪砂糖會社(明治十五年)は最も著名なものである。又燐寸の製造は明治八年に小杉又三郎等が初めて鞞通にて創業し、次で各區に多くの製造所が起り、十三年の頃には已に經營者三十名に達し、その資質も優良となりたる爲め、遂に外くの外國輸出を見るに至つたけれども、十六年以來支那地方の販路杜絶して悲境に陥つた。¹⁴⁾その後當業者の努力によつて多少盛大となりたるも、今日では大阪市に對しては殆どるに足らざる工業になつた。又皮革業は市外渡邊村地方に於て古くより盛に行はれて居たが、洋式製革を初めたるは谷澤儀右衛門である。彼は明治六年東京に於て創業したる米人チャリス、ヘンリー・カイルの技術を傳へたる際、西村等に就きてその傳授を受け、大阪に初めて洋式鞞革法を傳へた。爾來洋式兵制の採用と共に皮革製品の需要が大となり、徳川時代よりの傳統と相俟つて大阪は製革工業に於て重要な地位を占むるに至つた。¹⁵⁾而して治明十八年に創立せられたる新田製革所はその最も著しきものである。大倉組も已に明治二十年前に於て大阪に皮革工場を有し相當の生産力を有した。

(4) 機械金屬工業 徳川時代から金銀銅鐵が多く大阪に集つて來た關係上、鑄造業又は精煉業は相當に盛大にして、特に住友は所々の銅山より荒銅を持ち來りてその精煉を行つて居た。然るに造幣局の設立せらるゝに及び銅吹所を豫州に移轉した。¹⁶⁾その後住友の廣瀬幸平は五代友厚と共に大久保利通の保護の下に明治十四年西成郡今宮村に於て製銅會社(五代氏傳記には金銀分析所

14) 大阪府誌二ノ四四六頁

15) 日本工業史、化學工業編七〇五頁以下

16) 大阪編年史、明治五年の條

とある)を設けた。¹⁷⁾ 又十九年には支那人の出資にて資本金五千圓、職工三百人を有する分銅社が設立された。その他今日存在する金屬工業、造船業、機械業は何れも日清戦後の成立にかゝるが、只明治十四年に西成郡六軒家新田に設立せられたる大阪鐵工所は外人の資本によるものではあるが、當時としては最も大規模なる工場であつた。その他にはこの種に屬する工業では特筆すべきもの少く、従て大阪に對しては大なる經濟的意義を有しなかつたことは、明治三十四年迄の大阪の事情を調査したる大阪府誌の工業史中に全く之に關する事が記述せられて居ないのである。推察することが出来る。

(5) 雜工業 明治維新以後に初めて起つた雜工業の中で特に顯著なるものは、人力車の製造、靴の製造及び洋傘の製造であらう。併し人力車并に靴は當時尙ほ需要少く、販路も内地に限られ、工業としては特筆すべき程度に至らなかつたが、獨り洋傘は相當外國より輸入せらるゝ有様であつたから、已に明治五年の頃には日野利三郎といへる人が竹骨金巾張りの模造品を製造販賣した。更に翌六年には井上淺が製造を企て、之と前後して芝川又右衛門外數名の人々が斯業を開始した。爾來洋風の流行と共にその需要増加し、十年頃には企業者十名内外となり、遂に十三年頃には産額東京を凌駕し、支那方面に輸出しうるに至つた。¹⁸⁾ 今日でこそ大阪の洋傘製造業は微々たるものであるが、當時としては相當に注目せられたものである事を知りうると同時に、外國品

17) 大阪編年史、明治十四年十二月の條

18) 大阪府誌二ノ四九七頁以下

に對する嗜好の強かりし事を推察しうるであらう。

四 明治初年の大阪新工業の經營狀態

當時の新立工業はその生産技術も幼稚であり、販路も狭小にして生産も少く、規模も頗る些々たるものであつた事はいふを俟たぬが、今日の大阪の工業と當時の夫れとを比較する上にはその經營形態の特徴を觀察するの必要がある。故に以下經營組織と資本の調達、動力、所在地等につきて少しく述べよう。

イ、經營組織と資本の調達

維新以前に於ては商工業共に株仲間なるものが存在したけれども、之は各個の經營者の獨占的地位を保障し、かねて幕府各藩が直接にその行政需要を充たし又は運上冥加金を徴收して財政の一助とする爲めであつた。從て各經營者が勞力又は資本を結合して團體經營をなす爲めではなかつた。殊に當時の株仲間は大部分商業仲間にして、工業に屬するものは極めて少かつた。維新後株仲間は依然として存続を認められたが、その弊害が大となり殊に自由主義が主張せらるゝに至つて遂に明治五年四月にその解散を命じた。併し傳習の久しき、株仲間の廢止によつて商人は著しく打撃を蒙り、その復活を主張したが、從來の如き特權組合とはなり得ず、その代り時の政府

はもと株仲間（株主の組合）に屬したるものをして通商會社又は商社を設立して自己の經濟的地位を確保すべき事を勧誘した。かくして多くの通商會社が大阪に設けられたが、それは何れも商業金融并に運送業を行ふものにして、自ら工業を營みしものは一もなかつたようである。¹⁹⁾故に前項に述べた種々の新立工業は舊來の工業に比すれば可なり組織的であり且つ規模も稍大きくはあつたが、商社の如き組合企業又は會社企業によつたものではなく、多くは個人企業にして、個人が共同する場合にも僅めて少數者の結合によるものであつて、今でいふ組合や會社の形で行つたのではない。従てその經營資本は自己の所有資金又は他人より個人貸借によるの外はなく、商社に於けるが如く、出資額に應じて利益の配當をなすが如き組織ではなかつた。只少數の工業に於ては一種の匿名組合の如き制度があつたやうである。之れは出資者が外國人なる場合に多く行はれた。例へば大阪鐵工所は名義人が日本人であるが實は神戸の外商ハンターであつたし、マッチ製造所たる三光社、分銅社、川崎村の建築社の如きも川口居留地の支那人が投資して居り、この外蝙蝠傘や石鹼製造業には支那人が多く參加して居たといふ。²⁰⁾

かくの如く工業に於ては團體企業が發達せず、特殊なる技術の修得者が技術のみを元手として經營し、組織の知識に欠ぐる所があつたから、營業資本の調達は彼等の最も困難とした所である。政府が最初に技術を普及せしめ、之に次で資金の補助を與へたるは當時としては適宜の策で

19) 荻野和太郎、明治初年に於ける大阪通商會社（經濟論叢二七ノ五、一一二頁以下）

20) 商業資料第二號

あつたといはねばならぬ。併し乍ら政府が個人の企業に對して資金を融通し又は工場機械その他の固定資本を下附し又は拂下げをなす事には、當時の如く政治組織の尙ほ整頓せざる時代に於ては、多くの弊害を伴ひ、種々の問題を惹起した。即ち政商その他の有力なる實業家に對しては種々の恩恵が與へられ易いが、實際國家經濟上必ず保護奨勵せらるべきものでもその經營者が微力なる場合に於ては、政府よりの資金の融通を受ける事が困難であつた。而して大阪の新立工業は已に述べたるが如く、二三のものを除いて比較的無名の技術家によつて創設せられたるが故に、政府の保護によらずして自力を以て經營し、一般人から資金の融通を得て居たようである。通商會社の任務としては金融業も重なるもの、一つであつたが、その工業方面に行はれたるものは少かつた。²¹⁾之は工業方面よりも他の事業の方が當時一層緊急であつたのと、工業が尙ほ小規模にして必しもまごまりたる大資金を要しなかつたことに起因するものと思はれる。又大規模のもので新式の工業の創設は危険視せられたから之に投資する事を好まなかつたことは、前項に述べた百武安兵衛氏の製紙工業の設立事情に徴しても之を想像する事が出来る。²²⁾

□、工業用動力

造幣局は當時大阪に於ける最大の綜合工場であつて、汽關を動力として居た事はいふ迄もない。元來大阪に於いて石炭を生産用又は動力用として最初に利用したのは淀川汽船であつたが、

21) 菅野氏前出論文一二五頁以下
22) 前出眞島氏所藏文書

造幣局の設立と共に石炭の消費量が増加し、之れに刺戟されて他の工業も亦石炭を消費するに至つた。²³⁾ 併し明治十年以前に創設せられた新工業にして火力に由て機械を運轉したものは殆どないようである。之は機械を應用するが如き大規模のものが少かつたのと、汽關その他の設備に多くの固定資本を投ずるの餘裕がなかつたからである。大阪に於て最初に設立された澁谷紡績所は如何なる動力を用ひたかは明かでないが、恐らく火力であつたと思はれる。併し火力は當時高價に ついたものか、その後に出來た桑原紡績所では水力が使用せられ、之が大阪府下に於ける水力紡績の嚆矢だといふ。²⁴⁾ 又大日本紡績會社の福本元之助氏の懷古談によれば明治初年には紡績の動力として水力が多く利用せられたようである。尤もその水力は如何にして利用せられたかは明かでない。大阪鐵工所の如きも明治二十六年に尙ほ汽關二個、馬力五十七といふ有様であるから、²⁵⁾ 他の手工業本位の工業に火力又は水力の利用せらるゝ事の少かつたのは想像に難くない。

八、工場の所在地

工場の地理的分布には一定の法則があつて、聚落の形態又は人口密集度と工場の規模との間には必然的關係を有す。即ち人口の密集度が大なる所に於ては小工業の割合が大にして大工業が少く、密集度の少き所には大工業の割合が大にして小工業が少い傾向がある。²⁶⁾ 大阪が工業都市として發達して以來、現に大工業は年々遠心力的運動を爲して市外に移動し、市中には小工業の割合

23) 大阪商業會議所商業資料石炭の調査、

24) 大阪府誌二ノ五一七頁

25) 商業資料第二號

26) 拙著經濟史論考一八五頁

が増加して居る。明治初年に創設せられた新工業の地理的分布を見るに、矢張り大工業は市と近接した地域（之は今日では多く市中になつてゐるが）に設けられた。造幣局、大阪鐵工所、大阪紡績の如きは之れであるが、他の中小工業は多く舊市街中に設けられた。中之島堂島附近には可なり大きな工場が造られたが、之は當時この地方に空地が多く今日の如く人口も密集して居なかつた事、舊藩時代の藏屋敷などが利用せられずしてそのままに残つて居た事、及び當時交通機關が發達せず、主として水運によりたると、鐵道が大阪の北部にあつたとの關係から、この地域に新工業が起つたのである。併し今日では之等の新立工業は市中と爲れるこの地域に存立する事が出来ず、或は全く衰滅し或は他の有利なる地方に移動して行つたのである。故に今日の工業地帯と明治初年の夫れとは大體の移動方向は同じだが、然かも全く異なるものとなつたのである。

五 餘 言

右に概説したる大阪の新立工業は時代の要求によつて生れ、且つ當時の工業政策の影響を直接間接に受くる所は少くない。従て他の地方の新立工業と根本的に異なるものとはいへないであらう。徳川時代に於ては大阪は經濟上江戸に對して積極的影響を有し、武士は元より町人と雖も大阪商人に依存するの状態であつた。又維新直後に於ては、何處も同様に革命の影響を蒙り町人階

級は大なる打撃を蒙つたけれども、大阪には三百年間蓄積せられたる富が尙ほ多く残つて居たから、東京に比し幾分有利であつた。さればこそ幕府が大阪の財力を頼み之を完全に統御せんとして徳川慶喜が態々大阪に下向したのであり、又明治元年の春には明治天皇が親しく行幸せられたのである。つまり大阪を安定せしめその財力を支配しうるや否やは即ち天下分け目であつたのである。大阪に造幣局が設けられたのも大阪の財力を基礎とせんが爲めであつたと思はれる。

かくの如く大阪は經濟界の指導者であつたに拘はらず、車駕一度東幸して政治の中心が東京に移り、新式の政治組織に基く新なる國家需要が起り、一般民衆の西洋的嗜好の流行するに至つて、單に各地方より輻輳し來る在來の貨物のみを配給して居た大阪は新立の商工業に對しては全く東京に追隨せざるを得なくなつた。造幣局は別として、前に述べたる新立工業はその成立が何れも東京より少くも二三年おくれ、又は東京附近に設立せられたる模範工場より技術を傳習したるか、或はその他東京に在りし工業を移植したものであつて、新立工業の先驅となりしものは極めて少い。又補助金獎勵金が東京の政府より與へらるゝの結果は、往々にして大阪の商人がどうか東京中心主義の氣風に捉はれ易かつた。

右の如き事情の結果は又新工業の設立の途行が東京の夫れと多少異らざるを得ぬ。大阪の新工業は多く東京の夫に追従せざるを得なかつたけれども、然かも政府の保護獎勵を受くる程度も少

く、又當時の勸業政策に基く模範工場もなく、且つ一旦大阪の地に植えつけられてからは、夫々自立獨歩の發達を遂げ、政治に依存するの程度は、東京の夫れと全く異つて居る。今日東京の工業が著しく政治的色彩を有し、財政需要と密接の關係あるに反して、大阪の工業は外國貿易を主要目標とするもの又は一般市場本位のものゝ多きは、彼我その都市的機能の異なることに基くものといはねばならぬ。今本稿を了るに方りて、明治初年の大阪に於て一般市場を目標とする貨物を製造する模範工場又は保護獎勵による工業の少くして、自立主義のものゝ多かりし二三の理由を例示するであらう。

(1) 維新直後より大阪に造幣局が設立せられ、之には種々の新式製造部門を附屬せしめたるが故に、そこから新なる工業知識が供給せらるゝ事となつた。故に造幣局は元來模範工場の目的を以て出来たものではないが、事實上模範工場たるの機能を發揮し得たる點は、他の模範工場以上である。従て大阪に於ては別に模範工場を起すの必要が少かつたのである。その附屬の補助工業も漸次民間に拂下げられ、或はそこに行はれたる技術が傳はつて、種々の新式工業の基礎となつたものが少くない。

(2) 新立工業の生産物を大量に需要するものは主として政府官廳であつたが、大阪には之れが比較的少かつた。造幣局は新工業製品の大量需要者であつたが、それは概ね局内に附屬する工

場によつて充足せられ、最初は民業と殆ど無關係にあつた。之等の事情は大阪に新工業を勃興せしむるの必要を少からしめ、従て又之を保存し或は模範工場を設くるに至らなかつたのである。

(3) 又大阪の市民に比して東京在住者の生活様式は進歩的であつて、西洋式行政官廳に生活する役人并に之に關係する職業の人々は矢張り、新奇の洋品を需要するが故に、この方面の工業が東京に發達し易いし、又その設立の必要があつた。一般人の日常に使用する新奇の貨物の製造が概ね先づ東京横濱に起つたのも之れが爲めである。之れに反し大阪市民は保守的であつて、新式の洋品の消費は常に東京よりおくれる有様であつた。之等も大阪に於て新工業を特に保護する事を少からしめた理由の一つである。

(4) 大阪の町人は徳川時代から主として日本全國の貨物の配給并に金融に従事し、生産業を營む事が比較的少なく、大規模の經營といへば何れも商業并に金融業であつて、明治初年に於ても尙ほ之等の業務を有利とし且つ尊重する傾向が大であつた事も、大阪人の工業に對する興味を減せしめ、従て保護を受けて迄も工業を起さうとするものが少かつたのである。故に大阪在來の人にて政府の保護の下に新工業を起したものは少い。

(5) 大阪が中央政府を遠かつて居り、大官が居なかつたから、當時の如く大官の自由裁量で殆ど何事も出來た時代には、餘程有力な手蔓がなければ政府の保護を受けうるの機會が少かつた。併し大阪の財力も次第に回復し、こゝで工業を營む事は將來有望だとせられたので、大官が野に

下つて大阪で實業に従事しようとしたし、又大阪市民もかくの如き中央政府と連絡ある人の在阪を歓迎した事も争はれぬ事實である。自由主義であり進歩主義であるべき商工都市の大阪に於て、今日尙ほ官吏上りの實業家が非常に優待せらるゝのはこの時代の遺物ではあるまいか。

(8) 徳川時代三百年間に涵養せられたる自治自由の思想があり、又一時衰退したりとはいへ相當の金融資本力を有したるが故に、商人が政府の保護に餘り依存しないで工業を經營し得たる事も、當時の大阪の工業を特色づけるものである。

(7) かくの如く新工業に對する需要が東京に多くして、從て最初には東京附近に多くの新工業の模範工場保護工場が設立せられ、こゝに新式の生産技術が發達したるを以て、若しその工業が民間事業として有望となれば、大阪の人々はこゝから新知識を受けて來る方が迅速であり且つ有利であつて、敢えて大阪にこの種の工場を試設するの必要はなかつたからであらう。

以上は、明治初年に於て大阪に起りたる新立工業が他の地方特に東京の新工業と異なる點を指摘したのであるが、尙ほこの外にも種の事由を見出しうるであらう。而して之は概めて概括的に當時の大阪の新工業を通觀したるに止り、論じてつくさざるものゝ多く存するは言を俟たない。その一々の事項に關するは更に稿を更めて詳論するであらう。尙ほこの機會に於て、明治初年の大阪の工業に關する資料を有せらるゝ諸彦が、余の研究の爲めに指教せられん事を切望する次第である。